明治期〈平家〉の文化的展開をめぐる一考察

久保　勇（大学院人文社会科学研究科）

一　はじめに　―本稿の目的と前提―

アジア・太平洋戦争が終結して七十年目を迎える。この間、大きな自然災害を経験し、国内外に諸問題は山積しているものの、「戦争」に直接関わらない貴重な時間が流れてきた。治承・寿永の源平争乱を描く『平家物語』は、物語が成立した十三世紀から先の戦争終結に至るおよそ七百年間―程度の差はあるにせよ―武力を以て世を治める社会のなかで受け継がれてきた。つまり現在に至る七十年間は、歴史的時間の広がりからみれば十分の一に過ぎぬ短さであり、私たちは『平家物語』を日本史上希有な時代のなかで読んでいることになる。このことに自覚的でありつつ、そのうえで『平家物語』を如何に受け継いでいくか考える必要があろう。

そこで本稿では「いま」を相対化するために、日本における近代の黎明期となる「明治」（一八六八～一九一二）を主たる検証範囲とし、『平家物語』という文学作品のみならず周辺の文化事象（平家琵琶など）を含めて〈平家〉と称し、その文化が如何に展開していったか、一端について明らかにしていく。

既に筆者は、本稿の前段階として「明治期の『平家物語』研究―福地桜痴から館山漸之進、山田孝雄へ」[1]を公

にした。研究史上よく知られているように、近代『平家物語』研究を本格化したのは、文部省国語調査委員会から嘱託された山田孝雄（一八七三～一九〇六）の成果、明治四十四年の『平家物語考』[2]である。一方、その前年となる明治四十三年に館山漸之進は『平家音楽史』[3]を発表している。津軽藩で前田流を伝承し、上京して東京音楽学校嘱託となった館山漸之進は、明治新政府による当道座の解体（明治四年）で盲人による平家琵琶が衰退の一途にあった明治の末、その保護・研究を訴え、数々の苦難を乗り越え同書を大成した。前稿では、明治期を代表する館山・山田の両研究の前段階に、福地桜痴（＝源一郎、一八四一～一九〇六）の〈平家〉研究があったことを明らかにした。

桜痴と〈平家〉の関係について概ね二点を指摘している。一つは山田孝雄以前に『平家物語』諸本本文の校勘作業を営んでいたこと、いま一つは自ら平家琵琶を演奏し保護活動を実践したことである。詳細については前稿を参照されたいが、本稿への接続を考慮し、以下簡単に触れておく。

前者について従来見過ごされてきた資料として、『日出（やまと）國新聞』明治三十五（一九〇二）年一月二十九日「叙事の主眼」を紹介、そこに「平家物語を愛読するの餘り長門本、嵯峨本を初とし凡そ二十餘種に及び彼此を参照して考定」したことが認められ、長門本―覚一本―源平盛衰記という諸本の先後を論じ、付記ながら「延慶本が長門本より古き乎と思はるゝ節もあり」という先駆的な見解を示していることを指摘した。さらに後者の平家琵琶の実践と保護について、維新以前から平家琵琶に関わっていたという本人の談、技量の悪さにも関わらず聴取を強要する笑話が多く伝わっていること、主宰する平曲会に館山漸之進を招聘していたこと（『平家音楽史』）等々を指摘している。

テキストとしての『平家物語』諸本の校勘作業、そして平家琵琶の実践・保護という桜痴の活動を裏付ける動機は、儒医の父・福地苟庵（こうあん）が大坂の篠崎小竹（しょうちく）の許で修行中、師から以下のように諭されたことに遡る。[4]

平家物語の文章は能く吟味すると餘程面白いので暗誦しやうと思つて居つたが其後琵琶法師の語るのを聽いて尚更面白いので夫から平家を語る樣になつた、御前も己の弟子と爲つて學問をする樣に爲つたから平家も語つたら宜からう

桜痴は、篠崎小竹が父・苟庵に語った弁を踏襲したようである。如上の桜痴の証言に基づき、「桜痴にとって「語る平家」の実践と本文の研究は一体のもので、「国語」を支える営みであったとも位置づけ」られると見通し、前稿の小括とした。一応の結論は得たものの、福地桜痴の〈平家〉との関わりから見える文化的展開の裾野はより広く、さまざまな問題を内包しているため、ここから続考することにしたい。概ね以下の手順を採る。

前稿の結論から考えるべき問題は、幕末の知識人（儒者等）による平家琵琶の実践である。桜痴は江戸最後の宗匠・福住順賀（一八〇六～一八八六）の平家琵琶に幕末から親しんでおり、まず平家琵琶伝承者と知識人の関係から考えてみる。次いで考えるべきは、明治になってから盲僧の平家琵琶を支えた人々の営みについてである。そして、今日までの平家琵琶継承を可能にした晴眼者の平家琵琶―館山漸之進―を学問的に支えた梅澤和軒（＝精一、一八七一～一九三一）の存在に注目する。さらに『平家物語』を愛読した明治の青年の事例として、漱石とも交友のあった市原隆作（＝自適、一八七四～一九三六）を取り上げる。最後に「明治」＝近代軍事国家

形成期における『平家物語』の位置について考える。

二　幕末知識人たちの平家琵琶　―福地桜痴が継承したもの―

福地桜痴の父・苟庵が大坂修行時代、師・篠崎小竹の影響で平家琵琶を実践するようになった経緯について、前稿の繰り返しになるが、重要な問題を含むので再掲[5]する。

親の事を云ふのは可笑しいが私の親は私より學者で長州の人で長府に生まれ長府で學問して萩でも學問して夫から江戸へ出て來て修業をしましたが江戸で意を得なかつたので大阪に行つて篠崎小竹の門人と爲つて小竹の塾頭に爲りました、小竹先生は山陽先生と大變親密な間柄です、所が山陽先生は琵琶が嗜きで能く遣つたさうです、平家の中に濱戦と云ふ段があります、夫は何でする新中納言知盛の子息の知章が父に代つて討死すると云ふ段である、ソコを山陽先生が好んで遣つたさうです、夫で小竹先生も平家を語る様になつたさうですが所が面白くないものですから誰も聽き人がない、夫を亡父は謹んで聽いて居つたさうです、是は何でする亡父は假名書の文章が嗜きだつたからね、或る日先生に『ドウしてソンナ面白くもない誰も聽き人のないものを御語りなさるか』と聽くと先生の云はれるには〈先述引用部へ続く〉

問題を摘記すれば、①篠崎小竹は頼山陽が「浜戦」（＝巻九）を好んで語ったことに影響されて自身も語るようになった、②小竹の平家琵琶は面白くないので誰も聴く人がなかった、③詞章が「仮名書」の文章なので苟庵

が魅力を感じていた、となる。まず、③については前稿の結論に繋がるが、篠崎小竹の許での学問とは別に、親しむことが出来た仮名書き文は「声」になった〈平家〉ということである。

①の頼山陽の平家琵琶実践について検証する。裏付けとなる資料は、山陽の母・梅颸（ばいし）の日記を基に木崎好尚（こうしょう）が明治三十八年（一九〇五）に発表した『家庭の頼山陽』[6]、またこれを引用・考証した『平家音楽史』[7]等となる。前書によって文政十年（一八二七）、山陽四十八歳の頃から平家に親しんだことが知られるが、漸之進も注目した木崎好尚の評（三四一頁）は以下の通りである。（引用部傍線は久保による。以降同）

山陽の平家を語るを、近年の嗜みと見ゆ。雪堂は藤井何がしといへる下京の質屋の主人にて、波多野流の平曲に堪能なりければ、山陽も就て學びしならん。山陽が平家の相手は、いつも門人牧善助（贛齋）にして、琵琶役を勤めさせられしが、間拍子の抜けたる琵琶の手には、善助いと迷惑し、先生の書齋より、善助……といふ呼聲聞ゆる毎に、またお相手の御用かと、牧はちゞみ上がりしとなり、京師の同流に名ある、今の藤村検校の話

挿話の取材源は、波多野流最後の検校・藤村性禅（＝繁三、一八五三～一九一一）であり、次に挙げる資料も加え、信憑性が高い。館山漸之進は『家庭の頼山陽』所収の児玉旗山（一八〇一～一八三五）の漢詩を根拠に、「間拍子の抜けたる」に疑義を挟み、「山陽の平家は、平凡にあらざるを知るべきなり」と断じている。しかしながら、やはり山陽の平家は音曲としては平凡であったらしい。山陽の平家琵琶の師・藤井雪堂（?～一八三九）

の著『追増平語偶談』[8]（一八三四）に、以下の評を認めるからである。

一向に文意しらずして、節音曲のみを語る平語は、端哥三味線など聞様にて水臭し。又文句をおもひ入て、下手に語れば、浄瑠璃の様にて、聞もうるさし。此間のけじめ大事也。先文章を心に解して、うや〳〵しく誠心に語り出べし。文段多は主上大臣家を始め皆高貴のかた〴〵の御上をのみつゞりてたつ物なれば、恭敬の意を忘るべからず。頼山陽子などの平語は、上手とは云べからねど、何となく聞に感情の催さるゝ様なりしは、物語一部の大體に通じて文意に委しき故なるべし。自餘の音曲とはちがひ、さまで音曲上手ならぬも、志だにいやしからぬは、哀も深く情も晴れたるべし。されば閑居の友として、心ざしをやしなひ、老後の樂とせむにはまたなきもの也。

物語の本文に通じた者が語る平家は「上手」ではなくても、それだけで心に響くものとなるという教えである。加えて他の音曲とは異なり、上手でなくとも「志」さえ高ければ情感を伝え得るという、技術よりも精神性をも重視した主張でもある。如上の雪堂の教示は、山陽にも伝えられたであろうから、当人が語りの巧拙に拘泥しなかったことも想像に難くない。してみれば、山陽の影響で平家を語るようになった篠崎小竹、その弟子の福地苟庵、そして桜痴も、この教えを継いだのではなかろうか。いまひとつ同時代の知識人による平家語りの事例を加えるならば、同じく在京の本草学者で医師の山本亡羊（ぼうよう）（一七七八～一八五九）の以下[9]の伝がある。

又先生壯年の時平曲を星野検校に學び老年に及びて更に平曲の名人に就て其音調聲曲を質し自ら平家物語全部を手写す　其平生愛せられるゝ所の琵琶時鳥今尚家に保存す先生音吐鐘の如し

初めて平曲を學び演ぜられしとき隣人河内屋仙助といふ者驚きて人に告げ曰く山本先生發狂せりと

初めて平家を語って隣人に発狂したと言わしめたのは半ば笑話だが、福地桜痴のエピソードとさして変わらない。また「老後の楽」として実践したのは、『追増平語偶談』の教えにも一致する。因みに、近時松田清氏が発見・整理された「山本読書室」の仮目録中[10]には「五二七琵琶　亡羊遺愛　時鳥」、「四三八九　平曲譜本　鱸」とあって、右の話が裏付けられる。また、同目録中に「四六二三　平曲保存講／重陽社／口述　明治三十年五月／廿八号廿九号」ともあって、明治の京都で藤村性禅の門弟が組織した「重陽社」（後述）と亡羊の子孫が関わりを持っていたことも興味深い。

これらの資料によってみると、文章修養（暗唱）のために平家を語り、その巧拙に全く拘泥せず聴衆を悩ませた福地桜痴の平家琵琶は、明治にあっては奇異だったが、右に見たような幕末の知識人らの営みの延長線上にあったとみれば納得できる。ところで、当道座の伝統では酒席で語るのを嫌ったようだが、山陽の記録や桜痴の挿話によれば酒席で語られることが多かった。平家の「音」を評して「悲壮感憤」とした（『日本外史』）頼山陽だったが、自ら演者となった山陽の〈平家〉の趣きは別物であったと考えるべきだろう。

前後してしまうが、「平曲」なる呼称の時代的問題がある。山下宏明氏は「江戸時代に『平曲正節』の書名があり、一部文人らの間で行われたのであろう」と述べている[11]が、当道座の検校・勾当らの「平家琵琶」、そして

晴眼者（知識人）らの「平曲」という二つの名称が併存していたことにも留意する必要があろう。なお、本稿では基本的に「平家琵琶」の呼称で統一している。

結果論ではあるが、明治四年（一八七一）の「盲官廃止令」により「平家琵琶」が直ちに断絶せずに細々ながらも続いたのは、東京で明治三十年代まで続いた福地桜痴や大槻如電といった知識人たちの「平曲」の支えがあったからである。これは京都でも同様であり、次節で確認していくことにしたい。

三　平家琵琶の行方　―当道座の解体とその後を支えた人々―

再び桜痴に戻れば、彼が平家を語ることになったのは明治十四年（一八八一）一月（当時四十一歳）、成島柳北と連れだって原口喜運の平家を聴いたことによると伝えられている。[12] 本人の回顧によれば、長崎時代の読書経験のなかで『平家物語』に親しみ、上京後には「本所の總錄邸に月に一回づゝの平家の會がありまして盲人が語りますのを聽きに行つた」という素地があった。加えて運命とも言うべき縁があった。それは以下[13]の福住検校との出会いである。

> 夫は舊幕府の町奉行をした筒井肥前守と云ふ人がありました、彼の人は長崎奉行を務めたことがある、私の親も長崎に居つて懇意に爲つたので私が江戸に來た時分に親の添書を持つて筒井を尋ねたことがある、其後に爲りまして筒井は外國奉行になりました、私も其外國奉行の支配下と爲つて大變筒井に愛されました、彼の人の指南は福住檢校と云ふ盲人でした、此人は石岡檢校〈久保注・「麻岡」の誤り〉の門人で琵琶法師の

一人であつた、ソコで段々心易くなりまして度〳〵福住検校の琵琶を聴聞に行きました。

幕末の外交交渉に手腕を発揮した外国奉行・筒井政憲（まさのり）（一七七八～一八五九）を介した福住検校との出会いには、複数の縁が絡みあっている。福住検校は筒井政憲の三男「順賀一」で、安政五年（一八五八）麻岡検校没後に第七世江戸宗匠（一方前田流）となったものの、明治四年（一八七一）の当道座解体により総録屋敷を没収され、その後熊谷に隠居している。その伝記研究は比較的多く、最近の研究として永井啓夫氏のもの[14]がある。平家琵琶の衰退について、後述する京都の藤村性禅も含め、「悲惨な末路」と位置付け「完成された芸態を伝承するために社会的保護が必要」と主張するものである。確かに盲官廃止が平家琵琶（盲僧）を滅ぼしたというのが一般的な理解ではあるが、加藤康昭氏の研究[15]によれば、明治八年（一八七五）七月十二日の教部省達第二十九号により盲僧を天台宗管長の所轄取締とする旨が府県に通達され、明治十一年頃までには各府県で盲僧を承認し、盲僧廃止令は事実上撤回されている。つまり、保護された制度としての当道座は失われたが、盲僧として平家琵琶を続けることは社会的には可能であったはずで、永井氏のように制度的な観点からのみ説明するのは問題があろう。むしろ継いでいく「価値」が、伝承者当人ととりまく人々に見出だされなかったことが問題である。

子孫に当たる福住健吉氏は福住検校が遺した日記には、その全盛期が伝えられている[16]。たとえば「順賀は筒井の後盾で江戸の諸大名旗本の屋敷の出入を許され、お祝や法要の席で平家琵琶を弾じて澤山の御土産を頂戴した」とか、検校の官位を得る際に上京する「道中の格式は大名の資格と同じで乗物を許され、〈中略〉時の金で壹千両もかゝつた」といった話である。明治十七年（一八八四）八月八日に皇后（後の昭憲太后の宮）が熊谷市

竹井本陣行啓の際、御前で平家琵琶を弾じ、御賞美とともに御下賜品を拝受したのを最後の名誉としたという。かつて盲僧が貸金業を営むほど富裕であったことは知られているが、豪奢な環境に浸った福住が生活力に欠け、平家琵琶を金銭と等価と見ていたことは想像に難くない。その価値が保証されなくなったため、伝承者である福住自身が琵琶を置くに至ったのであろう。

一方、京都の事情は一八〇度異なる。波多野流最後の検校・藤村性禅（せいぜん）は、職屋敷の廃止と実家（両替商・伊勢屋）の倒産が重なり、経済的に困窮しながら、明治四十四年（一九一一）に没するまでの間、生涯をかけて平家琵琶の継承に心を砕いた。

藤村性禅の生涯は、兼常清佐氏が未亡人・いく子氏に直接取材した伝記研究[17]によってかなり詳細に知ることができる。明治四年（一八七一）に十九歳で職屋敷を追われ、明治四十四年春の法然上人七百年忌（於・小松谷正林寺）の頓写会で披露した「戒文」を最後に没したその人生は、まさに「明治」を通して平家琵琶に捧げたものであった。兼常論文の完成度が高いため、再検証の余地はほとんどないが、性禅を支え平家琵琶を継承しようとした人々に注目してみる。

性禅は当初、自分と同じ盲人への継承を志し、「京都盲唖院」における教授によってそれを実現しようとしたのだが、失敗に終わっている。兼常氏によれば「賣れない平曲は自然疎外せられた」という。追跡調査を試みれば[18]、京都盲唖院の設立は明治十一年（一八七八）だが、明治十七年二月の入学試験三日目の午後に「上下京にて糸竹の道に堪能なる人を数拾名招きおのおのその得たる技芸」を披露する会が設けられ、その演目の中に「琵琶（弓流し）藤村繁三」（『京都滋賀新報』二月十五日）とある。翌十八年にも「平曲梶原貳度の駈「石田光太郎」

……琵琶、平曲、那須与一中音「藤村繁三、石田光太郎」」（『中外電報』三月十七日）とあり、十九年にも「琵琶平曲（宇治川）石田光太郎……琵琶平曲三艸勢揃櫻同音藤村性禅」（『中外電報』三月二十一日）という記録が認められる。ただ、以降の盲唖院に関わる記事からは姿を消している。つまり、性禅が盲唖院における後継者育成を断念したのは、明治二十年あたりであったろう。

問題となるのは右の盲唖院入学試験の際、性禅（繁三）以外に平曲を演じた石田光太郎なる人物である。これは、明治十六年五月に発足した性禅門下の結社「重陽社」の構成員、「石田韞玉」であろう。以下「重陽社」については兼常氏の研究によるが、「普通の人で平曲に趣味あるものが検校を師としてその教をうけたものは前後十数人」で、兼常氏の執筆当時存命であった湯浅半月（＝吉郎、京都府立図書館長）や宇野半吉（医師）は平家全部を伝承していたという。また、上冷泉家第二十二代当主の冷泉為系（ためつぎ）も門下にあった。では「重陽社」とはいかなる組織であったのか。

これを知る資料として、兼常氏は重陽社の「三要五禁」を全文掲載している。明治十六年五月十四日、「日下錦臺／北邨文石／酒井汲華／岩田鯉巖／石田韞玉」五名の署名により性禅に提出されたその内容は、緩やかでもあり厳しい面もある。会は「同學懇和の爲」に組織され、その名は「平」の字を解体すると「八十一」となり「九九」となる（折字）ので重陽の節句に由来している。趣旨は同好会的だが、平曲を演奏するにあたっては「節倹を致とし古風を斟酌すべ」きとし、続く「五禁」では①劇場などでの平曲演奏を禁ずる、②無断で他人に伝えない、③「絃歌を沽り野俗の遊藝を以て生業をなすもの」に伝えない、④神社法楽・仏寺勧進、公の場で演じるのは良いが「三絃唱歌の類」との出演順に配慮しなければならない、⑤「静坐澄心の時」に演じるべきで酔った折

の余興や喧噪の中で演じない、と綴られている。④で「鄭聲淫調のもの」（みだらな内容と調子）とまで形容されるように、他の芸能（箏曲、三味線）との関係については手厳しい（③も同）。江戸の福住順賀は平家琵琶と箏とを学び、熊谷隠居後は専ら箏が生活を助けていたというが、京都の性禅は箏の腕前があるにも関わらず決してそれをしなかった。その理由は、性禅の言葉から明らかである。

箏の師匠はみな卑劣である。下司根性である。念頭にあるものはたゞ黄金ばかりでその仕事は蓄財より外に出でぬ。もし今箏を教へるならば、その人々と交際せねばならぬが、それは到底予が堪え得る處でない。貧しくともいゝ。苦るしくともいゝ。予は一人平曲を樂んで世を送る。

重陽社の門人らも右の師の意思を日頃から承知し、「五禁」を定めたのであろう。このような性禅と重陽社の人々の平家琵琶普及に向けた活動の実態について、薄田泣菫は以下の話を伝えている。[19]

以前京都で月に一度づつ琵琶法師の藤村性禅氏を中心に平曲好きの人達の会合が催されてゐた事があつた。場所は寺町四条の浄教寺で、京都図書館長の湯浅半月氏を始め二三の弾手が集まつたが、聴衆はいつも十人そこ〳〵で、それも初めの一二段を聴くと、何時いつの間にかこそ〳〵逃げ出して、肝腎の藤村検校が出る頃には、聴衆は一人も居ないといふやうな事が少くなかつた。

これではならぬと、仲間の歌詠（うたよみ）や画家（えかき）に塗（なす）つて貰つた短冊を五六枚と、茶菓子一皿を景品のつもりで、最後

まで聴いて呉れた人に送ることにしたが、短冊と茶菓子の人並外れて好きな京都人も、矢張り最後まで居残る人は一人も無かつたので、折角の名案も何の役にも立たなかつた事がある。

引出物を惜しまぬ重陽社の人々の熱意と経済力が知られるものの、それ以上に一般の人々にとって彼らの平家琵琶が聴くに堪えぬものであったことがわかる。これは、先述の頼山陽や山本亡羊の平家琵琶を聴いた京の人びとの反応と然して変わりがない。門人らに限らず、師・性禅についても「藤村師の平曲は規矩準縄にかなへるも、其の気魄なきは実に玭瑕たり、平家は由来睡眠を催す底のものに非ず」との批判的な評[20]もある。概ね京都の平家琵琶は、藤村性禅を中心に熱心な保護活動を行うも、その魅力が人々に伝わらなかったようである。一方、先の評は続けて「余曾て東京にあり、故原口検校の平曲を聞き山陽の平家の賛辞に深く感服したり」とあり、東京の平曲（福住順賀の弟子で福地桜痴が師事した原口喜運）は頼山陽の「其の音悲壮感憤、聴く者悽愴ならざるはなし」の評に適う魅力があったと伝えている。前田流と波多野流という流派の違いはそれとして、旧幕府（武家）の膝元・江戸で継承された平家琵琶には迫力があり魅力を残していたが、伝統としては古いが貴族や知識人らに賞翫されてきた京都の平家琵琶にはそれがなかったということになろうか。

江戸最後の総録屋敷を継いだ福住順賀には平家琵琶を継承する気概がなく、京都職屋敷を継いだ藤村性禅は生涯をそれに懸けたにも関わらず、門人らを除いて人々の理解を得ることができなかったのは皮肉としか言いようがない。東京には福住の後、麻岡検校門下の第八世宗匠鏡島城千、第九世宗匠伊豆島宗昌（一八三二～一八九九）、深川照阿（一八三三～一九一五）が残っていたが、彼らと積極的に関わり平家琵琶の場を設けたのは、福

地桜痴や大槻如電らによる「平曲保存會」（明治二十九年十一月に上野公園内美術協会館内に発足）であった。明治三十九年一月に桜痴が没し、館山漸之進が平家琵琶保存の公的立場（明治四十年九月東京音楽学校邦楽調査掛嘱託）を得て『平家音楽史』（明治四十三年）を大成するまでの数年間、同会の活動は衰退の一途を辿ったようである。

「平曲保存會」は上野の地の近く瀬川雅亮邸（五条天神社神職）において、深川照阿の門人三十名弱で継続されていた。会員の一人、木全宗八（きまた）（売茶業、名古屋出身）は毎月二十二日には神田佐柄木町の自宅内で「樹扇会」を催し、荻野検校を祀り平曲を手向けていた。木全は雑誌『歌舞音曲』に二年間十四編もの「平曲談」を連載するが[21]、その内容は旧来の説を敷衍するか、稚拙な持論に過ぎなかった。初めて同誌に木全の「平曲伝説」が掲載された明治四十一年一月、大槻如電が同誌会員を辞す広告が大きく掲載されている。如電はおそらく素人集団と化した「平曲保存會」と袂を分かったのであろう。このような状況から、深川照阿門人から漸之進に師事する者も出（竹中悍）、平家琵琶の保存と研究は、漸之進の双肩にかかってくる。

四　平家琵琶の実践と研究　―館山漸之進を支えた梅澤和軒―

とはいえ、館山漸之進は孤高の伝承者ではなく、彼を支えた多くの人脈は『平家音楽史』から知られるところである。ただ、同書を成すにあたって欠かすことのできなかった一番の協力者は、梅澤和軒（＝精一、一八七一～一九三一）であったと考えられる。梅澤和軒は研究史上ほとんど注目されず、評価されるのは『平家正節』を底本にし、当時としては専門性の高い注釈が付されている『平家物語評釋』[22]ぐらいであろう。同書もまた二人の

出会いがなければ世に送り出されなかったのである。

私たちの多くは『平家音楽史』の復刻版[23]を参照しているが、同版は初版本掲載の巻頭図版と多くの人々による「序文」が大幅に削除されている。つまり「序」から知り得る二人の出会い、そして『平家音楽史』大成の経緯はほとんど顧られていないのである。以下、梅澤精一名で寄せられた「序」から確認しておきたい。

余の翁と相見しは、實に三年以前にあり。余の先考、嘗て法官として任に弘前にありき。余も亦從ふ。余や源平興亡の史蹟に潜心し、鎌倉時代の文藝を愛し、而してホーマーの叙事詩にも比すべき平家物語の討究に最も腐心する者。翁の斯樂を提唱するや、一日翁を西小川町の假寓に訪ふ。寒暖の挨拶終りて、談弘前に及べば、圖らざりき翁の令閨は余が當時の隣人ならんとは。往事茫々二十有五年、昨なほ今の如く余其の奇遇に驚きぬ。これより意氣相投合して、一見舊知の如し。

此の時翁は平家音樂史の草稿を示さる。受けて之れを見るに紙數二百に滿たず、排列序なく漫然たる記述、殆んど樂史の躰裁を具備せず。余即ち翁に語るに、近代の編纂法を以てす。翁余が言を容れ、遂に七度稿を改め、四度星霜を經て、貧苦徹骨の裏に袤然たる一大册を編成せり。

右の序文の日付が「明治四十三年六月十六日」とあるので、和軒が漸之進を初めて訪ねたのは明治四十年ごろとなる。梅澤和軒は国文学者としても美術評論家としても名を残しているが、その多様な研究遍歴の全貌は明らかではない。東京専門学校（現早稲田大学）文科で学んだが、哲学者・大西祝（はじめ）にも師事したようで、初期の精

一名義の著作[24]には西洋の哲学論や文芸批評がある。大正の初めまで国文学研究に携わるも、その後は美術評論に専心している。国文学研究では西行研究や清少納言と紫式部研究が著名だが、『平家物語』についての論も少なくない。〈平家〉の処女論文[25]の冒頭は以下の通りである。

近頃國樂保存論勃興して、平家及び俗曲が音樂學校に保存せられ擴張せらるゝことと爲つた。平家は微妙入玄のもので、俗耳に入り難いが、斯道の名家館山翁より借り得たる材料により傍ら余が調査せる所を陳述して見やうと思ふ。

館山漸之進に対しては「近代の編纂法」を伝授しつつ、漸之進所有の資料をもとに梅澤和軒の〈平家〉研究が始まったわけで、明治四十三年に『平家音楽史』が大成するまでの三年間は「二人三脚」の日々であった。

和軒の『平家物語』研究で注目されるのは、山田孝雄よりも一歩先に発表されている諸本研究である。大雑把に諸本研究史の位置を確認すれば、江戸期に『大日本史』編纂のため彰考館で編まれた『参考源平盛衰記』が明治十五年（史籍集覧本）に出版され、前稿で取り上げた福地桜痴の本文比較は明治三十五年（着手は十七年頃からとの本人談あり）一月に発表されている。そして、梅澤は明治四十一年に漸之進から借り受けた「那須家所藏平家物語目録」を紹介する先の論考を発表しているのである。ただしこの段階では『平家正節』は参看するも「他の異本は未だ瞥見だもせぬ」状態であった。その後、明治四十四年には「那須家所藏平家物語目録」を再検討[26]し、そこでは「書中には、内容の同一な物がある、例へば根來本と延慶本と嵯峨本とが同一」という見解が示されて

いて、諸本本文を調査した痕跡がうかがわれる。加えて『平家物語』諸本を「語本」と「読本」とに二大別する案を夙に提示していたことも注目される。

語本の特色は、灌頂巻を別巻とし、大小秘事句を秘傳と爲したるにあれど、歴史本即讀本では、灌頂を別巻とせず、年代的に記入したこと、事實を詳細にしたことが、兩者の差で、一は語る者、他は讀む者なることが其の根本的分水嶺たるは云ふまでもない。而して讀本には此處に歴史本と云つた盛衰記風な物と、語本から出た讀本との二種がある、後者は所謂流布本である。

『平家物語研究事典』[27]によれば「野村八良が、流布本は琵琶法師の語り本であるのに対し、源平盛衰記に長門本・延慶本を含めて読み本の性格を帯びるとしたのが、平家物語の諸本の中に「よみもの」としての概念を与えた端緒」としている。野村八良の当該論は大正十一年（一九二二）発表なので、梅澤の論はそこから約十年先行していたことになる。

＊　＊　＊

梅澤の研究は漸之進の『平家音楽史』と重なる内容が多いが、注目されるのは山田孝雄『平家物語考』との関係である。山田孝雄にとって梅澤・館山の先行研究は当然踏まえるべきだが、同書には漸之進の研究に触れるのみで、梅澤の研究は黙殺しているかの印象がある。その要因は、梅澤・館山両氏から痛烈な批判を受けていたからであろう。梅澤は「第一流の學者さへ、平家琵琶其物に就いて研究して居らぬのは咄々怪事と云はねばならぬ[28]」

とか、「平家物語の研究は、平曲を研究せぬ門外漢の容喙し得べきものでない。而して從來の學者は多くは、此の門外漢であつたのである」[29]といった〈平家〉研究の条件を掲げており、これは漸之進も同様である。漸之進による山田批判は『平家音楽史』に寄せられた「序」の所々に挟み込まれた「漸之進曰」の記述からよく知られているが、漸之進が翌年に発表した『平家物語史論』[30]には山田との交流、諸般の経緯が詳細に記されている。

文部省國語調査會の山田孝雄氏曰、國語調査會に於て、平家物語の研究を爲し、世に公に爲さんと欲し、余之れに當るを得たり。貴著の見解を聞くに、余の見解と徑庭なしと。山田氏は、平家音樂を學ぶを聞かず、之れを異とす。然れども國語調査會は、政府の事業にして、名士の集會なり、久年の疑問を解決して、之れを明晰にするも知るべからず、果して然らは、昭代の一美事にして、國家の慶幸と謂ふべく、山田氏の勞を多とせり。乃ち拙著の過誤なき證明と爲さんと欲し、平家音樂史の序文を要求せしに、其研究の大要を詳記して與へたり。其記する所を見るに、料らざりき舊來研究の竇弊を踏襲して、流布本の迷宮に入り、五里霧中に彷徨するの感あり、甚た失望せり。數次山田氏に會し、其誤解と認むる點を擧げ、親しく切言せしも、尚了解せざるか如し。山田氏は、勤勉苦學して、史學に長ぜしと云ふ。惜むべし、平家音樂の知識なし、其眞相を得ざる當然の事理にして、深く責むべきに非ず、其研鑽に當るの苦衷を憐む。而して懇切に與へたる序文を返戻するを得す。之れに意見を加ふるは、非禮の嫌あり、忍ばざる所なるも、其儘掲載すれば、世人の疑惑を招致するの虞あり、公平に吾の見る所を附記して發刊せり。

山田孝雄は自身が得た平家物語研究の成果を、漸之進『平家音楽史』の見解との間に「徑庭なし」と言ったにも関わらず、寄稿された山田の「序文」は漸之進の期待を裏切り失望させる内容であった（以上傍線部）。その後、数回にわたって山田氏に意見したものの容れなかった（以上二重傍線部）ため、「序文」に意見を差し挟む体裁になったという。

梅澤・館山と山田との対立はこれだけではなかった。山田孝雄が『国民新聞』明治四十三年（一九一〇）八月十七日に発表した「平曲の開祖生佛とは何ぞや」が、梅澤・館山から痛烈に批判されている。『徒然草』二百二十六段に伝える「生仏」は「正佛」が正しく、その正体は源資時であったというのが山田の結論で、漸之進は直ちに反論[31]し、梅澤は折に触れ繰り返しその説を批判している[32]。山田がこれに応えるところは管見に入っておらず、梅澤・館山と同じ土俵で戦わない態度を貫いたと想像される。結果、山田による『平家物語』の本文研究と、平家琵琶を知る館山・梅澤による〈平家〉研究とは、互いに高めあうことなく乖離していくこととなった。

研究史的に見て、この状態は長く続いたと言ってよい。昭和になって高木市之助が「平家物語に於て、それが成立し成長する際に、読まれる文学としてでなく、平曲として生れ、流行した」と喚起し、「平曲の場を発見し、一層明らかにし、そして諸本の分立・派生・継承などを平曲との関係に於て追究することは、やはり平家物語を今日的古典文学としてなまで受容するための必須の前提でなければならない」と主張したのは[33]、振り返ってみれば梅澤・館山の路線への回帰とも言える。その後しばらく「語り」論が展開したが、それも長くは続かず今日に至っている。拠って立つべき近代の研究史的原点（梅澤・館山）が見えなかったことが、その一因であったとも考えられる。

ところで、梅澤は短い〈平家〉研究の時間のなかで、奇しくも「明治」の終わりに立ち会っている。そこで説かれる『平家物語』観は、明治という時代の一側面―近代軍事国家―を生きた人々の意見を象徴しているようにもうけとめられる。『評釈』の「序」で「明治天皇の偉業は平家物語の結論なり」と起筆し、日露戦争の具体例を引き合いに『平家物語』を以下[34]のように位置付け、大正の世を見通している。

されば平家物語は之れを史乗とも見るべく、歴史小説とも見るべく、はた琵琶としても聴くべし。則ち平家物語は史學たり、文學たり、又音樂たり。而して女性殉死の龜鑑たり又武士道の精華たるなり。

武士道一轉せば紳士道とならん、軍人は武士道を、市民は紳士道を理想として大正新人たらざるべからず。

軍記物語と「武士道」については佐伯真一氏の研究[35]に詳しく、そこには「「世界人類の一大精華」である「武士道」」という言葉（明治三十一年）も引かれるが、梅澤に至って『平家物語』に「武士道の精華」という面を見出す点が興味深い。大津雄一氏[36]が指摘する通り、日露戦争の終結及びそれ以降の「武士道」の称揚に伴い、『平家物語』の位置付けが変わってくるのであろう。次節で扱う問題に繋げてみれば、「読んでいた世代」が及ぼした変化である。彼ら「読者」とは梅澤和軒と同様、日露戦争後の時勢に立ち会い、『平家物語』の端々に現実の世界とのアナロジーを発見した人々であった。

五　明治の『平家物語』読者の存在　―市原隆作（自適生）を例として―

明治における『平家物語』読者を考える上で、まず抑えておくべき画期は、明治二十三から二十四年（一八九〇～一八九一）である。諸氏が説かれるように[37]、二十三年には三上参次・高津鋤三郎による『日本文学史』、芳賀矢一・立花銑三郎による『国文学読本』が発表されたことで「国文学」の礎が築かれ、翌二十四年には博文館から『日本文学全書第二十巻平家物語』が刊行され、一般の読者にも広くテキストが提供されるようになった。学問的にも物質的にも環境が整ったとはいえ、ただちに多くの人々にそれらが浸透し、新たな文化的展開をむかえるには時間が必要で、一握りの学究か文筆に携わる人々による動画期として捉握すべきだろう。このあたりは大津雄一氏の整理を参照されたいが、英雄への注目や叙事詩的側面の発見と展開が、本格的に展開するのは、およそ明治三十年代中葉からである。やや古い高木市之助の整理[38]に拠れば、「当時の新しい作家評論家による平家への傾倒」（山田美妙・高山樗牛ら）に当たる動きである。

当時の作家や評論家は既に身に付けていた『平家物語』の読みに、新たに学んだ西洋文学の知識や批評方法を以て『平家物語』を論じ得たはずで、その逆ではなかろう。前稿でも触れたように、明治二十年代から刊行されてきた少年・青年向け投稿文芸雑誌（『少年園』『文庫』）などが、『平家物語』論を育む土壌となっていたと考えられる。やや下るが、芥川龍之介が明治四十三年二月『東京府立第三中学校友会雑誌』に投稿した「義仲論」も青年期の習作である。たとえば、高山樗牛の一連の平清盛論[39]は評価が高く、それこそ芥川にも影響を及ぼしているが、同時期（やや先行していたか）に小島烏水が、『文庫』誌上に発表した清盛論[40]もそれと比較して遜色ない

ものである。繰り返しになるが、明治三十五年の年頭を飾る同誌では「新古著作月旦『平家物語』[41]」なる特集企画が組まれ、烏水は自稿で「平家物語は、余が愛讀書中の尤物である」と筆を起こしている。特集企画にせよ、こうした烏水の宣言にせよ、少なからず想定されているのは同調する読者たちであろう。見えない読者像を考えるのは困難だが、「投稿読者」であったこと、その後『平家物語』に関わる著述をおこなっていること、この二つの条件をもとに、その営みについて辿ってみたい。

一例として、千葉県出身の市原隆作（号・自適生）を取り上げてみる。「市原隆作」をインターネットで検索すると、夏目漱石と書簡のやり取りのあった友人、そして『悲壮史蹟　屋島と壇の浦』[42]の著者として、その情報が挙がるものの、それ以上のことは知られない。漱石研究においてその人物像は明らかでなく、『平家物語』研究でも該著に注目されることはほとんどない。ただ、出身地である千葉県内の諸情報から、その人物像をある程度知ることができる。存命時に発行された『房總人名辭書』[43]には以下の記載がある。

明治七年十月長生郡土睦（つちむつ）村に生る、明治三十三年東京中學卒業、翌年東京國學院に入り三十七八年戦役に際し第十五師團第一野戦病院附陸軍一等看護長として出征、職務勉勵の廉を以て銀盃一個を賜はり、戦役勲功により勲七等青色桐葉章及金貳百圓を賜ふ、曾て山梨縣甲府中學校に教諭たりしが現時千葉縣師範學校教諭たり

千葉県師範学校は千葉大学（教育学部）の前身であり、千葉大学の先学にあたる人物である。さらに『睦沢村

史』[44]によれば、明治三十九年十月千葉県師範学校で国語漢文学科の教諭として三年間教鞭を執った後、病を理由に明治四十三年十月に退職、その後東京や広島の私立学校などで教鞭を執り、大正十一年五月広島県立広島第一中学校教諭、昭和二年三月には熊本県立工業学校に転じたが昭和八年三月末に休職、郷里の千葉に帰省した後、九年六月には退職している（「市原隆作碑」千葉県師範学校長三井政善書）。退職後は「軍人普通学会」を創設し、広く社会人を啓発したという。著書『屋島と壇の浦』の記載はあるが、その他の著述活動については見えないため、以下管見に入った限りの著述活動について述べる。

市原隆作は「自適生」の号（市原自適もあり）を用い、雑誌『文庫』に明治三十年三月から十一月までの間（当時二十三歳、東京中学校在学時）に新体詩八編と散文一編、計九回投稿が採用されている。また、千葉県師範学校在職時（三十三歳）に書いたと思われる紀行文（明治四十年八月～十月）が『國學院雑誌』に二編掲載されている。さらに、翌明治四十一年には市原隆作名義で「小指の由来[45]」を発表している。これは日露戦争で敵兵に小指を食いちぎられた兵士の話で、小指を代償としたものの、捕らえた敵兵が戦略上有益であったため叙勲されたという内容である。本人の叙勲歴から推せば実体験に基づくものかも知れない。加えて、これも千葉師範学校教諭時代の明治四十二年から起稿（当初は「前進主義」）していた『益進主義』なる著書[46]を明治四十四年九月に刊行している。著者凡例によれば「讀者は概ね教育程度の高からぬ人々なりしかば、極めて通俗に、引用また太だ卑近」に書かれたもので、書名から推されるような特定の思想主義に基づくものではなく、人間的成長を企図した啓蒙書の類である。ともあれ、基本的には国語漢文学の教諭であり、「投稿青年」から日露戦争従軍、紀行文や啓蒙書の発表という著述活動から、『屋島と壇の浦』に至ったとまとめることができる。

『屋島と壇の浦』は本編全十五節で、頼朝の挙兵から三種の神器・頼朝義経の不和といった壇の浦戦後までの史的展開を、『平家物語』（長門本含）『源平盛衰記』『愚管抄』『吾妻鏡』等を用いて解説・考証し、その間「史蹟めぐり」四編を挿み、本編末に前年発表の「新曲平忠度」を転載、「武門政治管見」「源平雑筆」二編を巻末附録に加えて構成されている。「巻頭言」によれば、平家一門の盛衰ははっきりとして、またその終焉は悲絶壮絶であり、一門に礼を以て香華を手向ける思いで筆を執ったという。また、池邊義象に序文と校閲を、竹越與三郎には序文を、それぞれ依頼したが間に合わなかったという。「史蹟だより」は関係のない挿話も含まれるが、一書として単調に陥らぬよう掲載したと断っている。最後に「稍考証の痕あれども、余はとも〴〵『趣味』を旨として筆を執りたるなり。二つながら意の如くならざるを愧づ」と謙虚な姿勢を示すが、自身の能力の卑小さを述べるのは著者の癖らしく、既発表稿の其処此処にも見受けられる。内容的には、当時利用し得る諸史資料はもとより、竹越與三郎・山路愛山・大森金五郎等の見解も参照し、考証として一定の水準を保っていると言える。たとえば、山路愛山の「福原に別業を置き其所より京都を支配せんとしたる點に於て、頼朝の鎌倉より京都を制したるに先鞭を着けたるもの」とする見解を首肯し、平氏による武家政権樹立を評価するあたり、今日の歴史学研究の成果と繋がるものである。

現在、私の手許にあるのは明治四十五年三月刊の六版で、前年十一月に初版、翌月中に四版、年明けて五版というペースで増刷され、本書は相当部数を売り上げたようである。その要因は、本編の考証より旅行記「史蹟めぐり」や附録の二編の魅力にあったと考えられよう。「史蹟めぐり」は本編脱稿後、池邊義象から「實蹟を觀て來い」と言われ、出版社からも援助を得て実現した十日間の調査旅行の記録で、その旅程は一の谷・屋島・壇の

浦までである。前著『益進主義』と同様、さほど教育程度の高くない読者を想定したのか、通俗的な部分はあるものの、今日でも十分面白い。ただし、史蹟に向き合う姿勢は「史蹟といふよりは詩蹟」とか「古蹟のある土地の有力者は、多少研究的態度を以て合理的の調査をして置く必要があると思ふ。それでなければ世の進歩に捨てられて、愛相をつかされるだらう」という具合に手厳しい。このあたりのバランス感覚が本書の魅力と言える。さらに加えれば、附編「武門政治管見」の末部に「封建政治」を論じて「武士道」の精神に言及していることが注目される。天皇を頂点とする「各級の間に主従關係成立して一種の道徳が行は」れたのが「武士道」であり、その影響を次のように述べる。

この精神たる、大國民として立つに缺くべからざる精神にして、今日世界の強國一としてこの制度の下に修養を經ざるものなし。我日本が最近世界的問題に遭遇してよく發達しつつあるは、全く封建制度の長期修養を經たる賜なりとす。

右の見解もまた、先に見た梅澤和軒の主張と変わらぬ、明治末年の代表的認識の一つであろう。この背後に、彼らが育った近代軍事国家の精神的支柱である『軍人勅諭』の存在があることは想像に難くない。明治十五年（一八八二）の『軍人勅諭』とその後の「武士道」精神の展開については、菅野覚明氏が詳述されている[47]のでそれに譲るが、ここでは『軍人勅諭』が「軍記」の文体に支えられていること、それは他でもない福地桜痴の草するところであったことに注目しておきたい。三宅雪嶺[48]は『勅諭』末部の「抑此の五箇条は我軍人の精神にして、……

朕一人の懌びのみならんや。」を引用した後、以下のように評している。

普通の勅諭と文体を異にし、之を喜ぶ者少からざれど、斯かる文体なるは之に限られ、他は従来の文体となる。是れ福地源一郎が旨を承けて草せし所に係り、福地は太平記体を好み、井上毅は書経体を好み、相ひ容るゝ能はず。井上が岩倉及び伊藤を通じて勢力あり。詔勅は書経体の森厳なるに若かずとせらる。

「書経体」は「詔令」の範とする文体だが、「太平記体」なる文体は認知されている呼称ではなかろう。福地桜痴が軍記の文体を好んだことを知っての謂と考えられる。明治一桁生まれで知的水準が高く、日露戦争に従軍した市原隆作のような青年たちが、『平家物語』とその時代精神を論じるとき、既に彼らが軍記の文体に基づいた近代軍事国家の規範に絡め取られていた事実は見過ごせない。

日清・日露戦争の経験により、「近代」軍事国家の存在（『軍人勅諭』）が現実として再認識されること、それは「明治」という時代に読まれていた「前近代の〈平家〉」が、「近代の〈平家〉」となる契機となったのではないか。そして、そこにはやはり福地桜痴の〈平家〉が関わっていたのである。

六　結びにかえて

大津雄一氏は「国民的英雄叙事詩『平家物語』は、この国家主義・民族主義に傾いたロマン主義の産物である。つまりは近代の産物である」と述べている。[49] 前節末部で考えた「契機」もまたロマン主義の所産と言えるかも知

れない。ただし、大津氏が取り上げられた文壇・アカデミズムの動向と、本稿でたどってきた〈平家〉の文化的展開の具体相とは時期がずれている。『平家物語』の叙事詩的側面は明治二十九年（一八九六）の竹越與三郎『二千五百年史』に発見され、それを平曲の存在に結びつけて論じた生田長江「国民的叙事詩としての平家物語」[50]は、竹越から十年後の明治三十九年（一九〇六）のものである。江戸の知識人の〈平家〉を継承しつつ福地桜痴が論じた「叙事の主眼」（明治三十五年）は、内容的にも時期的にも叙事詩論に上せられるようなものではなかった。江戸の福住順賀、京都の藤村性禅、そして残された門弟らが守ろうとした平家琵琶も、生田の論とは結びつかぬまま衰退した。江戸の知識人の伝統を引く福地桜痴や大槻如電と交流し、明治の学究・梅澤和軒の協力を得た館山漸之進の成果は、平家琵琶の伝統をもっと今日に伝えられても良かったはずだが、後に主流となる山田孝雄のテキスト研究と対立した梅澤・館山の〈平家〉研究を大正以降に継ぐ者がなかった。

如上の明治の研究史についてはより多くの再検証が必要だが、福地桜痴のように『平家物語』を愛読し、文筆活動に携わった明治生まれの青年たちによる、〈平家〉の文化的展開（特に日露戦争を経た〈平家〉観の変容）は重要な課題であろう。試みとして市原隆作とその著作『悲壮史蹟　屋島と壇の浦』を取り上げたが、この著作に助言を与えた池邊義象もまた「明治」の世を通じて〈平家〉観を変えた人物の一人であった。

池邊は荻野由之・落合直文らと明治二十四年の『日本文学全書第貳拾輯平家物語』の校註を担当したが、明治三十八年（一九〇五）には『帝国軍人読本　巻一～三』[51]に携わり、戦地での活躍例を「今実盛」「今弁慶」などと紹介している。また、本来国語学者でその人物伝に未詳の部分が多い赤堀又次郎は、明治三十四年（一九〇一）に『国文要綱平家物語』[52]を発表した後、一時陸軍学校の教授職に就いている。つまり明治の末、「軍記」を知る

者が現実の軍事教導にその知識を期待され、利用されていたのである。ただし、後に池邊は法制史家に、赤堀は批評活動に、それぞれ専念して国文学者として戦争と関わる道を歩むことはなかった。加えて言えば、「今日軍人の精神たる武士道の精華は悉く一巻の平家物語に存す」と主張した梅澤和軒も国文学者としての道を断っている。彼らが『平家物語』と戦争を論じ続けなかったのは、それが一つのブームに過ぎなかったからかも知れないし、各々関心が次に移っただけなのかも知れない。もしこのことに自覚的であったとすれば、見識として捉えるべきであろう。

国文学者が国文学者として軍記と向き合い続け、本格的に戦争に加担していくのはアジア・太平洋戦争期であり、それは大津雄一氏が指摘されたように「近代日本の一つの不幸」であった。山田孝雄も戦後公職追放となり「不幸」を負った一人である。あらためて『平家物語』と向き合っている幸せとその危うさを思う。ひとまずここで擱くことにしたい。

【注】

（1）『人文社会科学研究』二五号、千葉大学大学院人文社会科学研究科、二〇一一・九

（2）報告書名は『国語史料鎌倉時代之部　平家物語につきての研究　前編』国語調査委員會編纂、國定教科書共同販賣所、一九一一

（3）木村安重、一九一〇

（4）筆録者未詳「福地源一郎君　平家琵琶」（中央新聞社編『名士の嗜好』文武堂、一九〇〇）

（5）注（4）に同じ

（6）金港堂書籍、一九〇五
（7）『平家音楽史』五六六～五七四頁、ほか鈴木まどか氏「平家琵琶の豆知識」ＨＰ「頼山陽のこと」二〇〇七・六・二〇（http://d.hatena.ne.jp/heikebiwa/20070630/p1）
（8）冨倉徳次郎『西海余滴集―幷、追増平語偶談―』（古典文庫一〇九）一九五六
（9）中島民之介『山本亡羊先生小伝』（七頁）旧京都博物会、一九〇九
（10）『山本読書室資料仮目録統合電子版』二〇一四・三（http://matsudakiyoshi.com/dokusho.pdf）
（11）『琵琶法師の『平家物語』と能』（一一四頁）塙書房、二〇〇六
（12）『平家音楽史』四六九頁、注（4）本人談など
（13）注（4）に同じ
（14）「福住順賀―江戸平曲の終焉―」（『日本大学芸術学部学術研究』三号、一九七〇・一二）
（15）『日本盲人社会史研究』（四七六～四七八頁）未来社、一九七四
（16）「筒井伊賀守と福住順賀」（『熊谷郷土会誌』七号、一九四二・二）
（17）「平語及び平家琵琶」（心理學論集２『日本の音楽』六合館、一九一三）
（18）以下の部分は、岸博実編著『歴史の手ざわり　新聞・雑誌が描いた盲唖院・盲学校　京都盲唖院～京都府立盲学校（誕生から義務化まで）『資料室だより』（創刊号～五〇号）』（私家版、二〇一〇・三）に転載された各新聞記事による。
（19）「汗と涙の音曲」（『大阪毎日新聞』大正五年（一九一六）四月三〇日夕刊、『茶話』に収録）
（20）「穉松の平家詞曲談」（初出『音楽雑誌』、『平家音楽史』（二六〇～二六一頁）より転載）
（21）『歌舞音曲』歌舞音曲会、一〇号から二三号（一九〇八・一～一九〇九・二）
（22）日進堂書店、一九一二
（23）藝林舎、一九七一（渥美かをる索引）

(24) 三才社の雑誌『聲』の明治三三年（一九〇〇）刊行分（二六号～四八号）を調査したところ、十二編の掲載稿を確認している。大西祝への追悼文は四七号（一九〇〇・一一・一六）に掲載。
(25) 「平家詞曲談（上）」（『新小説』一九〇八・三）
(26) 「平家物語の新研究（下）」（『時事新報』明治四四年（一九一一）八月三日）
(27) 梶原正昭氏執筆、明治書院、一九七八
(28) 「平家物語の新研究（上）」（『時事新報』明治四四年（一九一一）八月一日）
(29) 注（22）『平家物語評釋』の自序
(30) 館山天民、一九一一
(31) 「平曲の開祖に就いて」（『東京日日新聞』明治四三年（一九一〇）八月二六日）
(32) 「平曲の傳授」（『風俗志林』一巻一号、一九一一）や注（22）『平家物語評釋』の頭注など
(33) 「解説」（岩波日本古典文学大系32『平家物語上』岩波書店、一九五九）
(34) 注（29）に同じ
(35) 『戦場の精神史　武士道という幻影』ＮＨＫ出版、二〇〇四
(36) 『平家物語』の再誕　創られた国民叙事詩』ＮＨＫ出版、二〇一三
(37) 久松潜一氏『久松潜一著作集第十一巻』至文堂、一九六九、栃木孝惟氏「創成期保元物語研究史の考察」（『保元物語の形成』汲古書院、一九九七）
(38) 「研究史通観」（『国語国文学研究史大成9　平家物語』三省堂、一九七七）
(39) 「平清盛論」一九〇一・一一、『平相国』文武堂、一九〇二
(40) 「古今人物　平清盛」（『文庫』一五巻一号、一九〇〇・六）
(41) 『文庫』一九巻三号、一九〇三・一
(42) 文成社、一九一一・一一

(43) 千葉毎日新聞社、一九〇九
(44) 睦沢村村史編さん会議編、一九七七
(45) 『教訓仮作物語』文部省、一九〇八
(46) 名教館、一九一一
(47) 『武士道の逆襲』（第五章2節）講談社新書、二〇〇四
(48) 『同時代史　第二巻』（一五八頁）岩波書店、一九五〇
(49) 注（36）に同じ
(50) 『帝國文學』帝國文學会、一九〇六・三～五
(51) 厚生堂、一九〇五
(52) 東京専門学校出版部、一九〇一

【付記】本稿は「軍記・語り物研究会」第四〇〇回例会（二〇一四年一月二六日、於・早稲田大学）での研究発表「明治期における《平家》の盛衰―「啓蒙」あるいは「伝統」という視点から―」をもとに、その後の検討を加えてまとめたものです。研究会席上、さまざまなご指摘をいただいた各位に感謝いたします。なお、本研究はJSPS科研費25370208の助成を受けたものです。